

否定文における *espérer* と 直說法節／接続法節

近 藤 由 佳

0. 序 論

「Ps がQを期待しない、Qと思わない⁽¹⁾」という事柄にフランス語で言及するとき、発話者はしばしば *espérer* を用いて従節をともなった発話を構成する。その場合、従節の動詞は接続法に置かれるのが一般的であるが、直說法に置かれることもある。このことは、我々の調査⁽²⁾ から明らかなのであるが、直說法節と接続法節のあいだの叙法選択の問題についての詳しい記述はほとんどないようだ。

我々は、肯定平叙文における *espérer* に続く従節の動詞叙法選択のメカニズムについて、近藤 (1995b) で以下のような主旨の仮説を提案した。

発話者は、Qの現実性を明確に打ち出しつつ現実の時間の流れの中にQを位置付けようとし、かつ、それを伝えようとするものの中心、すなわち、発話のポイントとする場合に直說法を用いる。それに対して、Qを発話のポイントとはせずに、単に感情や評価の対象とし、現実の時間の流れの中にそれを位置付けようとする気持ちを持っていない場合には接続法を用いる。

本稿では、このような我々の仮説が否定文における *espérer* の後の直說法節と接続法節のあいだの選択についても有効であることを確かめたい。

まず、関連文献の記述を振り返り (1.1)、特に KAMPERS-MANHE, B. (1991) と HUOT, H. (1986) の記述を取り上げる (1.2)。その後、彼女らの

説に修正を加え (2.1), 発話例に沿って我々の仮説の正当性を検証していく (2.2)。最後に, 我々の仮説を手がかりに, Ps が第三者である場合についても考える (2.3)。

1. 関連文献の記述

1.1. 否定文における *espérer* の後の動詞叙法

GREVISSE, M. (1970), LE BIDOIS, G. & LE BIDOIS, R. (1971), COLIN, J. -P. (1993) によると, 否定文における *espérer* に続く従節の動詞は接続法に置かれるのが一般的である。しかし, DUPRÉ, P. (1972) が指摘するとおり, 時に直説法に置かれることもあるようだ。

(...), à la forme négative, *espérer* entraîne ordinairement le subjonctif, mais (...) l'indicatif n'est pas exclu. En particulier, au passé: *je n'espérais pas qu'il viendrait*, au lieu de *je n'espérais pas qu'il vint*, est usuel et ne peut être considéré comme incorrect. (p. 883)

実際, 我々の調査においても *espérer* の後に直説法節が置かれている例をいくつか得ることができた⁽³⁾。GREVISSE, M. (1970) は接続法節が置かれている場合については以下のように説明しているが, 直説法に置かれる場合については詳しく言及していない⁽⁴⁾。

Voyons maintenant les phrases négatives, où régulièrement *espérer que* appelle après lui le subjonctif (je n'espère pas qu'il vienne). Ici encore des nuances de pensée sont bonnes à observer. Il arrive que l'on veuille faire exprimer à la subordonnée non une possibilité, mais une certitude comme si *ne pas espérer que* prenait à peu près le sens de «rejeter l'affirmation que».

1.2. 否定のかかり方

KAMPERS-MANHE, B. (1991), HUOT, H. (1986) によれば, croire, dire,

penser などの《les verbes d'opinion》⁽⁵⁾ の後に続く従節の動詞が直説法に置かれている場合、否定は主節にかかるのではなく、Qにだけかかる。このことは、《Ps+ne+V+pas+que...》が《Ps+V+que... ne...pas》と言いかえられることからわかると述べている。それに対して、従節の動詞が接続法に置かれている場合、否定は文全体にかかり、PsはQをはっきりと否定することを避けていると述べている。

KAMPERS-MANHE, B. と HUOT, H. は croire の後に続く従節の動詞叙法について以下のように説明している。

(01a) Je ne crois pas que je suis amoureux.

(01b) Je ne crois pas que je sois amoureux.

(01a) は「je suis amoureux ということについて、私はそれが真実であると思わない」という意味で、croire と être amoureux の関係を否定している⁽⁶⁾。この場合、否定は《plus énergique》である。(01b) は「他人が私を être amoureux というカテゴリーに入る人物だと判断することには反対はしないが、自己分析した結果、私は être amoureux ではないという結果に至った」というような場合に用いられ、否定は文全体にかかる。この場合、否定は《moins énergique》である。

espérer は、近藤 (1995b) で述べたように、croire と同じ《les verbes d'opinion》に分類されるべき動詞であるから、KAMPERS-MANHE, B. と HUOT, H. の考え方をういて espérer の場合についても説明してみよう。

(02a) Je n'espère pas qu'il viendra.

(02b) Je n'espère pas qu'il vienne.

(02a) では従節の動詞が直説法に置かれているので、否定はQにかかることになる。この文は、「il viendra ということについて、私はそうなることを espérer していない」という意味になる。すなわち、espérer と il viendra との関係を否定しているのである。(02b) は従節の動詞が接続法に置かれているので、否定は文全体にかかる。この文は、「他人が il viendra ということについて可能性があると判断することには反対しないが、Psとしてはそうなることを

espérer していない」という意味になる。すなわち、ne pas espérer という Ps の判断を表しているのであって、Qの現実性を述べているのではないのである。これは基本的には我々の仮説に合致していると考えられるが、この説明が十分なものとは言えないのではないか。我々は否定のかかり方の分類の仕方に問題があると考ええる。次章ではこれについて考察する。

2. 仮説と検証

2.1. KAMPERS-MANHE, B. と HUOT, H. の記述の問題点

上で述べたように、KAMPERS-MANHE, B. と HUOT, H. は否定のかかり方を2通りにしか分けていないが、我々は曾我（1993）で述べられている考え方の方がよりうまく否定のかかり方を説明できると考える。曾我（1993）では penser の場合について考察しているが、その考え方をかりて espérer の場合について論じると以下のようになる。

否定のかかり方には3通りあると考える。まず、Qについて Ps が否定的な判断を下している、すなわち、「Qを Ps は espérer していない」ということを伝えようとするときである。この場合、否定は主節にかかる。また、この場合における espérer は douter と意味的に重複すると考えられ、発話者の ne pas espérer という判断を述べているにすぎない。したがって、Qを現実の時間の流れの中に位置付けようとする気持ちを持っていないので、接続法に置かれるのが自然であると考えられる。

次に、「espérer しているが、その対象がQではない」ということを伝えようとするときで、否定は espérer とQとの関係にかかる。この場合、発話者はQを現実の時間の流れの中に位置付けられた他の事態と同じレベルに置いて排除するのだから、直説法を用いるのが自然であると考えられる。

最後に、Qを espérer するという事柄の生起自体を否定する、すなわち、「主節の動詞も espérer 以外の動詞で、その事行の対象もQではない」というときである。この場合、否定は文全体にかかる。発話者はQを現実の時間の流れの

中に位置付けてとらえ、それを含む事柄全体を否定しているのだから、直説法を用いるのが自然であると考えられる。

2.2. 発話例の検討

ここでは序論で示した我々の仮説の方が KAMPERS-MANHE, B. や HUOT, H. の考え方よりも否定文における espérer の後に続く従節の動詞叙法選択を説明するのに有効であるということを、コーパスから得ることができたいくつかの発話例に沿って明らかにする。以下は否定文における espérer の後に直説法節が用いられている例である。

(03) (...) et je me doutais bien que tu finirais par me trouver. Je t'attendais, vois-tu, depuis longtemps. Mais je n'espérais pas que tu te donnerais à moi sans ton voile, avec tes cheveux dénoués, (...)

(ZOLA, E., *La faute de l'abbé Mouret*, p. 1344.)

(04) Oh! je n'espérais pas qu'il me regarderait!

(ROSTAND, E., *La Samaritaine*, III, 2.)

(05) Je n'espérais plus que le conflit se terminerait cette même année.

(HANSE, J., 1971, p. 296)

これら3つの発話に共通しているのは、主節の動詞である espérer が半過去形に置かれているということであり、「私はQと思っていたが」という意味を持つ。この場合、3通りの解釈が可能であると考えられる。1つは「そのときはQと思っていたが、今はQと思っている」という解釈、もう1つは「そのときはQと思っておらず、別のことを思い描いていた。」という解釈である。そして、最後に「今はQが現実となった、もしくは現実となりつつあるが、その時はQであると思っていた」という解釈である。いずれにしても、発話者はQを現実の時間の流れの中に位置付け、発話のポイントとしているから、直説法を用いた発話を構成する。1章で紹介した DUPRE, P. (1972) の記述で、否定文における espérer の後に続く従節の動詞叙法が直説法に置かれるのは、espérer が過去形である場合に多く見られるとされているのも納得

できる。

次に、従節に接続法が用いられている場合についても見てみよう。

(06) Je n'espère plus qu'il soit retrouvé vivant.

(Busse, W. & Dubost, J. -P., p. 133)

(07) (...), il la reçoit avec allégresse pourvu que le châtement lui semble mérité. Je n'espère pas qu'il en aille de même avec nos apaches.

(Barrès, M., *Mes Cahiers* t. 8., p. 255)

(08) (...) Je n'ose espérer que ce soit prochainement, mais je crois que cela arrivera tôt ou tard.

(Lamennais, F., *Lettres à la Baronne Cottu* (2), p. 199)

(06) は、「私は彼が生きたまま発見されるとはもはや思っていない」という意味で、(07) は、「私は彼がならず者たちと同じであると思わない」という意味である。すなわち、いずれも Q について、Ps が否定的な判断を下している。Q は ne pas espérer という発話者の評価の対象となっているだけで、発話のポイントとはなっていないから、発話者は Q を現実の時間の流れの中に位置付ける気持ちを持っていない。したがって、従節の動詞は直説法ではなく、接続法に置かれる。また、(08) は「私は絶対にそれが近々起こってほしくない」という意味である。この発話例の場合の oser は強調の助動詞であり、強い願望を表していると考えられる。よって、espérer は souhaiter の意味領域に入り、発話者は Q を現実の時間の流れの中に位置付けようとする気持ちを持っていない。したがって、従節の動詞は接続法に置かれる。

2.3. Ps が第三者の場合

Ps が第三者である場合、発話者が Q をどのようにとらえているかが重要である。これまでに検証してきた我々の仮説から、以下のように 3 つの場合に分けてみよう。

2.3.1. 発話者はQと思っている場合

この場合、Qを発話者の視点に立って提示するか、Psの視点に立って提示するかによって動詞叙法が決定される。前者の場合は発話者がQを現実の時間の流れの中に位置付けているのだから直説法に置かれ、後者の場合は発話者がQを現実の時間の流れの中に位置付ける気持ちを持っていないから、従節の動詞は接続法に置かれる。

(09) France, un homme qui écrit trop en grec, en prévu, veux-je dire. On est trop tranquille, avec lui : on n'espère pas qu'il manquera l'œuf.

(RENARD, J, *Journal*, p. 708)

(10) Il n'espère pas qu'il entendra de nouveau l'ordre mystérieux.

(BERNANOS G. *Sous le Soleil de Satin*, p. 299)

(11) Sans doute, elle n'espérait pas qu'il se soumettrait jusqu'à imiter la sainte simplicité de la tante du pianiste qui venait de s'écrier.

(PROUST, M., *Le côté de chez Swann*, p. 259)

これらはすべて、Qを発話者の視点に立って提示している例であると考えられる。

2.3.2. 発話者もQとっていない場合

この場合、Qを発話者の視点に立って提示しても、Psの視点に立って提示しても、Qを現実の時間の流れの中に位置付ける気持ちがないのだから、従節の動詞は接続法に置かれる。

(12) Orso devait partir avec sa sœur de très bon matin, et la veille au soir il avait pris congé de miss Lydia, car il n'espérait, pas qu'en sa faveur elle fit exception à ses habitudes de paresse.

(Mérimée, P., *Colomba*, P. 58)

2.3.3. 発話者が espérer に関して態度を保留している場合

この場合も、2.3.2. と同じで、Qを発話者の視点に立って提示しても、Ps

の視点に立って提示しても、Qを現実の時間の流れの中に位置付ける気持ちがないのだから、従節の動詞は接続法に置かれる。

- (13) Les fidèles n'espéraient plus qu'il vînt jamais, tant de fois Mme Verdurin en avait déjà fixé devant eux la date, (...).

(Proust, M., *La Recherche : Sodome et Gomorrhe* (3), p. 886)

3. 結 論

「Ps がQを期待しない、Qと思わない」という事柄に espérer を用いて発話を構成する場合において、発話者が従節に直說法節を用いるのはQを現実の時間の流れの中に位置付ける気持ちを持っているときであり、接続法節に置くのはQを現実の時間の流れの中に位置付ける気持ちを持っていないときであると説明できる。よって、近藤（1995b）で提案した仮説が否定文における espérer の後の従節の動詞叙法選択についても有効であるということがわかる。

我々は、否定文における espérer の後で、発話者がどのような場合に直說法節を用いるのかということを明らかにすることができた。

本稿では、Ps が第三者である場合については発話例を挙げて叙法選択のメカニズムを予測するにとどまり、検討しなかった。また、二重否定の場合については論じなかった。これらについては今後の課題としたい。

注

- (1) Ps は判断主体を、Qは事態を表すものとする。
- (2) DISCOTEXT を使用した。
- (3) espérer が否定文において用いられている発話例は13例あった。そのうち、直說法が用いられている例は6例、接続法が用いられている例も6例、判別不可能な例は1例であった。
- (4) GREVISSE はおそらくこの後、直說法を用いる場合の説明をしようとしていると考えられるが、記述はここまでとなっている。
- (5) 近藤（1995b）では《le verbe de jugement》という語を用いている。
- (6) これと、否定がQにだけかかるということが同じことを指すのか否かは不明である。

参考文献

- BUSSE, W. & DUBOST, J. -P. (1987): *Französisches Verblexikon*, Klette-Cotta, Stuttgart.
- COLIN, J. -P. (1993): *Dictionnaire des difficultés du français*, Le Robert, Paris.
- DUPRÉ, P. (1972): *Encyclopédie du bon français —dans l'usage contemporain—*, Édition de Trévise. Paris, pp. 881-883.
- GREVISSE, M. (1970): *Problèmes de langage*, t. 1., Duculot, Paris, pp. 301-312.
- HANSE, J. (1971): *Dictionnaire des difficultés grammaticales et lexicologiques*, C. N. E. S., Paris.
- KAMPERS-MANHE, B. (1991): *L'opposition subjonctif/indicatif dans les relatives*, Rodopi, Amsterdam-Atlanta, pp. 188-202.
- LE BIDOIS, G. & LE BIDOIS, R. (1971): *Syntaxe du français moderne*, t. 2., Edition A. et J. PICARD, Paris, pp. 357-358.
- LEEMAN-BOUIX, D. (1994): *Grammaire du verbe français: des formes au sens —Modes, aspects, temps, auxiliaires—*, Nathan, Paris, pp. 85-95.
- 近藤由佳 (1995a): Le mot 《espérer》et le choix du mode verbal après 《espérer》, 修士論文, 関西学院大学大学院文学研究科提出。
- 近藤由佳 (1995b 予定): 「動詞 espérer と直説法節／接続法節」, 『年報・フランス研究』29, 関西学院大学フランス学会。
- 曾我祐典 (1993): 「penser と接続法節・直説法節」, 『ふらんぼー』20, 東京外国語大学, pp. 1-15.